

審 議 結 果 (案)

次の審議会等を下記のとおり開催した。

| | | | |
|-----------|--|----------------|---------|
| 審議会等名称 | 第13期第3回神奈川県生涯学習審議会 | | |
| 開催日時 | 平成29年8月1日(火) 10時00分～12時00分 | | |
| 開催場所 | 波止場会館 4階大会議室 | | |
| 出席者 | 青木信二、有賀かおる、宇野努、大田裕多佳、大橋昌行、小沼徹、小野寺智美、加藤徹、岸部都、小池茂子(○)、小林英子、鈴木真理(◎)、田中信次、天井勝海、夏井美幸、野崎智、萩原建次郎 ※五十音順(◎は会長、○は副会長) | | |
| 次回開催予定日 | 平成29年11月上旬 | | |
| 問い合わせ先 | 所属名、担当者名 | 教育局生涯学習課 | 森、白川、廣瀬 |
| | 電話番号 | (045) 210-8342 | |
| | ファックス番号 | (045) 210-8939 | |
| 下記に掲載するもの | ○・議事録全文 ・議事録要約 | 要約した理由 | |

1 開会<事務局>

2 あいさつ<生涯学習部長>

(傍聴者確認)

○鈴木会長

審議に入る前に、本会議は原則公開となっておりますが、傍聴者を希望する方はいらっしゃいますか。

○事務局

傍聴を希望する方が1名いらっしゃいます。

○鈴木会長

それでは、入室していただいでください。

(…傍聴希望者入室)

3 議題

(1) 第13期生涯学習審議会諮問事項「地域と学校の連携・協働の推進」について

○鈴木会長

最初に、前回までの審議の概要について、事務局から報告願います。

○事務局

「資料1」により御説明いたします。第1回の内容については前回との重複となりますので資料を御覧いただくこととし、第2回の内容について主な発言等を御紹介いたします。

第2回審議会の内容は、生涯学習審議会第9期から12期までの答申等の概要説明、および、今期のテーマである「地域と学校の連携・協働」に関わる取組ということで2つの事例を御紹介いただきました。取組事例に関して主な発言を御紹介いたします。

厚木市森の里地区の学舎融合の事例では、

- ・地域と学校の連携では、地域側と学校側が互いに対等で主役になるWinWinのやり方になれば継続できるのではないのでしょうか。
- ・森の里地区では協働事業を実施するために緩やかな連携を形成しようとしています。この連携があるからこそ、何かやろうとしたときにすぐに動ける体制があるのです。
- ・システム化、組織化されたトップダウンの事業は尻すぼみになりがちです。意識をもってボトムアップでスタートした活動は継続していきます。また、ボトムアップの活動は、ゆるやかなネットワークができていきます。そのような地域に根ざした活動に育てていくことが大切です。
- ・コーディネーターは、指名するものではなく地域で育てていくものです。地域と学校とコーディネーターがともに育ち合ってまちづくりにつながっていかないと、地域学校協働本部がうまく機能しないのではないのでしょうか。
- ・コミュニティ・スクールと地域学校協働本部が対等な関係で活動を継続するためには、地域側がまちづくりを根本から考える必要があります。

といった御発言がありました。

続いて、小田原市における放課後子ども教室の事例では、

- ・コーディネーターの主な仕事は、活動プログラムの作成や関係機関との連絡調整です。
- ・コーディネーターの活動を通して、“良さ”を感じている点は、ボランティアやスタッフとの楽しい時間を共有できることや、放課後子ども教室だによりにより情報発信できること。一方悩みとして、ボランティアを探すのが大変なことや、学校の予定提示後の対応となるため時間的に厳しいことがあります。
- ・「放課後児童クラブ」との連携、一体化が課題です。放課後子ども教室はすべての児童を対象に無料で、放課後の安全で安心な子どもの居場所を提供するとともに、地域の方々にも参画いただきながら学習活動や体験活動を行うもので、放課後児童クラブは、対象を、保護者が就労等で昼間家庭にいない児童に限った活動です。
- ・放課後子ども教室の新規開設にあたっては、学校それぞれの問題意識や地域性を踏まえ

てフレキシブルに対応し、コンセプトを明確にした上で、各学校に合わせた実施方法で運営しています。

- ・学習支援を重点的に実施するため、学習アドバイザーには元教員を配置しており、これにより安心して学習支援が行える環境ができています。

といった説明がありました。

これらの説明に対する発言として

- ・学習支援について、学校で教えていることと、学校に附属しているところで教えていることとの関係はどうなのでしょう。学習支援の方法や内容はどこが責任をもつのか、がポイントになってくると思います。
- ・コーディネーターを学校に所属するものと位置づけるか、あるいは、地域の立場として位置づけ、学校同士の連携とは違う観点から見ていくのでしょうか。

といった投げかけや、比較対象事例として

- ・さいたま市では、PTAで活躍した方を学校支援のためにつないでいく仕掛けとしてコーディネーターになってもらう取組が行われています。この事例では、退職校長など教育や地域に明るい方がコーディネーターになり、どのボランティアが何を担うかのマッチングを行う一方、ボランティアは、学習ボランティアであっても一般の方もよいとするなど、広く求められるようにしている仕組みです。

といった事例の紹介がありました。

○鈴木会長

第2回の内容について何かございますでしょうか。

○有賀委員

小田原市の放課後子ども教室の新規開所校の写真をお持ちしました。6月に6校開設され、楽しく活動している子どもたちの様子を見ていただけたと思います。また、前回、小田原の事例に対し指摘された内容について補足したいと思います。

1点目、学習支援おける、学校で教えているものと、附属しているところで教えているものとの関係ですが、これは、教育委員会教育総務課の責任において行われているとのこと。私がかかわっている酒匂小学校では、学校で使っているプリントを使用していますが、他の学校では教育総務課が学年別のプリントを用意しています。学校には場所を提供いただいていると思いますが、基本的に、責任は教育総務課ということ。

2点目、コーディネーターの位置づけですが、地域の立場として位置づけられると思われ。なお、前回、コーディネーター同士の連携があるのか御質問がありました。現在コーディネーター8名が配属されており、7月3日に情報交換会を行ったところ。今後も定期的に行っていくとのこと。

○鈴木会長

補足していただきました。ありがとうございました。

今回は、学校の視点から考えるということで二つの事例発表をお願いしております。南足

柄市の野崎委員と藤沢市の小沼委員です。まず、野崎委員から南足柄市の「地域学校支援事業」について発表をお願いいたします。

○野崎委員

南足柄中学校の校長を務めております。南足柄市では「地域学校支援事業」を行っています。この事業によって、本校では、どのようなボランティアに入っているか、どのような地域の方々に学校の活動に参加していただいているか発表していきたいと思っております。

資料1は、南足柄市の地域学校支援事業の実施要項です。「地域との協働による学校づくり」を進めるためにスクールコーディネーターを配置していただいております。南足柄中の場合、スクールコーディネーターは2名、月16時間程度の配置です。学校によって人数は異なります。活動内容は、授業の参加、体験活動の推進、環境活動の推進、学校行事やPTA行事などがあります。

学校（教員）の側から、このような授業を行いたいので、このようなボランティアはいないでしょうか、という依頼がコーディネーターに行きます。コーディネーターはそれを受けて、登録してある学校支援ボランティアの中から調整したり、地域の方々の中からふさわしい方を探すといったことを行って、学校と家庭と地域をつないでいく役割を担っています。

学校支援ボランティアの導入によって、子どもたちにとっては、多様な体験や経験の機会を増やす、学校にとっては、開かれた学校を実現し活性化につながる、家庭・地域にとっては、生きがいづくりや自己実現が図られる、といった効果があります。

南足柄中での具体的な取組について、資料4を御覧ください。これはスクールコーディネーターが発行している通信です。そこに示したとおり、本校のボランティア活動として、図書室ボランティア、なんちゅうホットライブラリー、一輪挿しお花教室、花壇ボランティア、南中ミュージアムがあります。

図書室ボランティアは、本の整理や図書室の環境整備等を学校司書と一緒にしています。なんちゅうホットライブラリーは、昼休みに図書室で行う読み聞かせです。特別支援学級にも読み聞かせを行っていただいております。一輪挿しお花教室は、月1回程度昼休みに行っているもので、ボランティアの方に講師をしていただいております。花壇ボランティアは、校内の花壇を環境委員の生徒と一緒に、昼休みや放課後に世話をしてもらっています。南中ミュージアムは、校内にある展示コーナーで、ここに、地域の方々の作品等を展示しています。

その他に、学習支援・ゲストティーチャーとして授業にも関わっていただいております。具体的には、ミシンボランティアとして家庭科の授業に、また職業講話や「みなみあしがら学び」、国語の短歌指導、俳句指導などでも授業に関わっていただいております。

2年生では職場体験学習を行っており、自分で選んだ職場に2日間にわたり体験に行きますが、その前段階として行っているのが職業講話です。職業講話では、話をしてもらいたい職業について教員から案を出し、それを受けてコーディネーターが具体的にふさわしい

人を探し、依頼や調整を行っています。資料5は昨年度の実施内容で、7人の方が講話を行いました。依頼や調整の作業は、本来ならば教員がやらなくてはならないことだと思いますが、地域をよく知っているコーディネーターにやっていただけるのは、大変ありがたいと感じています。

1年生では南足柄市を学ぶ授業として「みなみあしがら学び」を総合学習の時間に行っています。この講師は、それぞれの分野で南足柄市において活躍されている方に務めていただいています。

以上が、南足柄中学での学校支援ボランティアとコーディネーターの活動の概要です。資料3は、市内の中学校3校における地域学校支援事業の成果と課題についてまとめたものです。特に課題として、「学校サイドからのスクールコーディネーターへの学校支援ボランティア要請が毎年少ない傾向がある」という点が挙げられています。これには、2つの要因が考えられます。1点目は、当事業は7年目を迎えますが、毎年同じボランティアに来ていただく形で定着しているため、新たなボランティアを開拓する必要があまりないこと。2点目は、学校としては、もっと学習支援ボランティアに入って欲しいという要望を持っていますが、なかなか入っていただけないことがあります。学習支援ボランティアは、技術科などの専門的な授業に関わってもらうことが多いため、ボランティアを増やすことが難しいのが現状です。一方で、花壇ボランティアなどは、おしゃべりをしながら楽しく作業できるため、ボランティアが多く集まります。やはり、ボランティアがやりがいを感じ、やってよかったなどと思わないと、継続していくのは難しいと思います。そのために、教員ががんばっていかなければいけないと感じているところです。

コーディネーターが2名いることにより、本来なら教員がやらなくてはならない部分を担っていただいております。特に、地域を良く知っている方に関わっていただけることは大きいです。

ボランティアが成功する要因として2点あげることができると考えています。1点目は、ボランティアがやりがいを感じること。2点目は、ボランティアに入っていただくことが子どもたちのためになった、と教員が感じることだと思います。

○鈴木会長

ありがとうございました。確認事項ありますでしょうか。

○加藤委員

南足柄市市民部生涯学習課の加藤です。南足柄市の事例ですので、少し補足をさせていただきます。

南足柄市は、中学校3校、小学校6校、幼稚園5園とコンパクトで風通しのいい規模となっており、その中で、スクールコーディネーターに活動いただいています。中学校では2名体制となっているため引継ぎがスムーズに行われていますが、幼稚園はそこまで体制が整っておらず、引継ぎが課題となっています。また、本日紹介された南足柄中の取組のほかにも、資料3に記載されているように、コーディネーターが連絡を取り合って、同じ中学校区

内の幼稚園、小学校、中学校が一緒に取り組むプロジェクトなども行われています。一方、課題として、市全体の小学校同士、中学校同士の横の繋がりとなるコーディネーター連絡会への要望の声も聞かれます。この事業は“連携”がなにより重要ですが、コーディネーターのやる気で連携が進みつつあると感じています。卒業式に参加して泣いて帰るボランティアも少なからずいて、事業の成果を感じているところです。

○鈴木会長

ありがとうございました。確認ですが、資料1①「南足柄市地域学校支援事業実施要項」と②の資料、および資料3はどこが作成しているものですか。

○野崎委員

市教育委員会です。

○鈴木会長

南足柄市の事業は、開始時期を見ると、文科省の学校支援地域本部の施策（※）が始まった時期とほぼ重なりますね。（※平成20年度から実施）

次に、藤沢市の事例の発表をお願いいたします。

○小沼委員

藤沢市立鶴洋小学校の校長を務めております。今日は、藤沢市が行っております「学校・家庭・地域連携推進事業」についてお話をさせていただきます。

藤沢市には、中学校19校、小学校35校、特別支援学校1校の55校があります。そのうち、中学校区を中心として15の協力者会議が置かれています（学校は19校ですが重複があるため15地域）。発足は平成11年で、3年間をかけて徐々に組織していきました。この組織のそもそもの目的は、地域課題の討議、地域コミュニティー事業、地域団体との連携事業、地域環境整備事業、学校支援事業、講演会・学習会、推進事業の周知といったところです。それぞれの地域で様々な活動が行われており、その中心となって活動している方々がいらっしゃいますが、コーディネーターという呼び方で委嘱するといったことはしていないことが、一つの特徴といえるかも知れません。

昨年度の具体的な取組としては、秋葉台地区の郷土の散策、湘南大庭地区の「ポイ捨てなくし隊」、御所見地区の卒業生激励会、湘南台地区の「フェスタとらいあんぐる」という小中高大が参加した地域のお祭りなどがありました。

当初は、組織化したものの何をすればよいかわからないという状況があったようです。しかし、組織され年数がたつていくと、地域ごとの特色が出てきて、現在ではいずれの地域も活発に活動している印象です。そのなかで今回御紹介するのは、私が前に校長を務めていた小学校がある六会地区の活動です。

六会地区の会議名は「学園都市むつあい」といいます。藤沢市立の学校以外に、日大藤沢中・高や日大生物資源科学部、多摩大学などの私立学校や県立高校など学校が多い地域であるため、学園都市と名づけられたそうです。これらの学校間の連携をしようということで、「学校間交流事業」が行われるようになりました。

学校間交流事業は、地域内の3小学校（天神、亀井野、六会）と、六会中学校、日大藤沢高校、藤沢工科高校とを年毎に入れ替えながら順番に6年生が交流するもので、秋ごろに行われています。例えば、六会小学校は昨年度、藤沢工科高校と交流を行いました。六会小学校は規模が大きく、6年生だけで200名を越える児童数のため、受け入れる学校にはいつも苦勞をかけているところですが、藤沢工科高校は、測量体験や皮細工、LEDを使ったものづくりなど、工科高校ならではの、子ども達も喜ぶ講座をワークショップ形式で用意してくださっています。高校側の感想を聞くと、高校生が先生役になって人に教えるという機会はあまりないので、高校としてもありがたい事業であるとのことでした。

この事業では、コーディネートは学校間で行うので、ボランティアに入っただけのは、生徒の往復経路に立って見守りをさせていただくことが中心となり、毎回5～6名のボランティアに来ていただいています。

その他、六会地区の三者連携ふじさわの活動としては、六会中学校の文化祭への参加があります。文化祭文化部門でブースを一ついただいて、普段の活動のPRを行っています。合わせて、有志の先生によるパフォーマンスなども行って盛り上げています。

また、私が現在校長を務めている鶴洋小学校（地域協力者会議＝鶴沼ふれあいトライアングル）ではミシンボランティアに入ってもらっています。三者連携ふじさわの組織を使ってボランティア募集の呼びかけをし、学校を支援している方（三者連携ふじさわとは別で活動）が、教員との調整や差配をし、全10回、各回3名程度を派遣してもらいました。子ども達は、作品作りの途中で失敗すると嫌になってしまう傾向がありますが、そこですぐに手を差し伸べてくれる人がそばにいて、多くの子ども達が作品を完成させることができました。またボランティアからは、子どもと一緒に作業できることがうれしいといった声があがっており、まさにWinWinの関係といえます。

○鈴木会長

ありがとうございました。確認したい事項はありますでしょうか。

○青木委員

資料に“市からの業務委託を受けて”とありますが、市の担当部署はどこでしょうか。

○小沼委員

当初は教育委員会の生涯学習課でしたが、生涯学習課が教育委員会から首長部局に移ったため、現在は、教育総務課に予算がついています。

○青木委員

いずれにしても、事業の主管は教育委員会ということですね。そのため、中学校区単位の組織ということになっているのでしょうか。

○小沼委員

そうです。

○鈴木会長

今回発表いただいた2つの事例を参考にしながら、御意見をお願いいたします。

○青木委員

地域と学校が連携する場合、エリア分けが問題となることがよくあります。藤沢市の場合、協力者会議の区割りは中学校区単位で、事務局が市民センターまたは公民館となっています。行政区と学校区でエリアが異なることによるトラブルなどはないのでしょうか。

○小沼委員

まさにそのとおりで、トラブルとまではいかないまでもややこしい問題があります。行政区と学校区が異なるところに位置する学校では、両方の活動に参加しなくてはならないなどの問題が生じているようです。

○鈴木会長

藤沢市の事例について、社会教育との連携はどうなっているのでしょうか。資料の『広報ふじさわ』を見ると、公民館の活動情報のところに三者連携ふじさわの情報がまったく掲載されていません。また、学園都市むつあいの、地域からのメンバーにも公民館の方は入っていないようなのですが。藤沢市は公民館の活動が活発なところでもあり、そこの関わりが見えてこないのはもったいない気がします。

○小沼委員

確かに公民館との関わりはほとんど出てきません。事務局としての関わりはあると思いますが、ほとんどの地区で、活動の前面に出てくるということはないように思います。

○鈴木会長

その部分は少し気になるところです。今回の2事例は、南足柄市は、学校の中で単独で地域との連携を考えている事例、藤沢市は、市全体で中学校区を意識した連携をし、大学まで関係している事例です。地域によってかなり様相が違いますが、コーディネーターや、それに相当する役割を担う存在があつてこそできるという点では共通しています。

○有賀委員

南足柄市の報告で、中学校ではコーディネーターの引継ぎがうまくいっているということでした。小田原市ではコーディネーターの後継者探しに苦勞しているところなのですが、何か秘訣などはあるのでしょうか。

○加藤委員

知っている事例の範囲のみでのお答えとなりますが、活動の中でつくってきたネットワークを活用して適任の方を探していると聞いています。

○野崎委員

本校も今年4月、コーディネーターが1名交代しました。ボランティアとして長く関わってきた方に新たなコーディネーターになっていただいたので、活動内容などもよく知っていてよかったと思っています。なお、南足柄市全体でスクールコーディネーター連携会議を年に数回行っています。そのためスクールコーディネーター同士の横のつながりができており、その中で紹介するなどしています。

○青木委員

南足柄市の事例について、スクールコーディネーターに様々な依頼をするということですが、それは、学校として依頼するのか、あるいは教員が単独で依頼するのでしょうか。

○野崎委員

両方のケースがあります。例えば、教員からミシンボランティアによる授業支援などの要望が出る場合もありますし、学年全体として要望が出る場合もあります。

○青木委員

ということは、学校側の窓口はたくさんあるということでしょうか。

○野崎委員

学校側の窓口は教頭です。

○天井委員

南足柄市の事例について、単なる支援活動から、連携、協働への道筋ができており、なおかつ、ネットワーク化・組織化されたすばらしい実践だと思いました。伺いたい点は、スクールコーディネーターの役割は、学校として検討してコーディネーターにお願いしているのでしょうか、あるいは、スクールコーディネーターも入って、学校経営の観点から一緒に検討しているのでしょうか。

○野崎委員

スクールコーディネーター2名のうち1名は、学校連携協議会（学校評議委員会）に加わっています。この協議会では、学校経営について校長から説明し、コーディネーターからも意見を出していただいています。

○天井委員

組織的には出来上がっているのに、実際にはボランティア要請が少なくなっているという報告がありました。なぜ機能しないのでしょうか。連携・協働のよさが教員に伝わっていないのではないのでしょうか。教育の成果について、報告会を行ったり、顕彰をしたりするなどPRを行っていかないと、教員には教員としてのプライドがあり、ボランティアに頼ろうとしない面があるかもしれません。両者が協働すればよりよい教育効果が期待できるということを示して、意識改革をしていないといけないのではないのでしょうか。

○野崎委員

御指摘のとおり、教員の中に、自分の授業は自分の城という意識があると思います。一方、ボランティアにも、学校の授業に関わっていくのは勇気がいるという感覚もあるようです。ただし、国語の短歌や俳句の指導では、ボランティアが積極的に入ってくださっているように、得意分野を活かしたい方はいるので、それを教員のニーズとマッチングできると授業支援にももっとボランティアに入っていただけではないかと思います。

○鈴木会長

小野寺委員、PTAの立場から、感想などありますか。

○小野寺委員

スクールコーディネーターがボランティアを探してくる、という報告がありましたが、逆

に、地域の方が“私はこういうことができますよ”ということコーディネーターに提案してくるということはあるのでしょうか。

○野崎委員

あります。年に1回、ボランティアの申込書を保護者に配布し提出してもらっていますが、それには得意なことを書く欄を設けてあります。また職業講話で、こういう話ならできますよ、という方はいらっしゃいます。

○小野寺委員

保護者の立場から見ていると、資格などを持っている保護者の方もたくさんいると思います。保護者も積極的にこういった事業に参加していければ、より学校が身近になると思います。私も、子どもの学校で地域の方が関わる事業に参加したことがあり、そば打ち体験をさせてもらったのですが、その時は、地域にこんな技術をお持ちの方がいらっしゃるのかということを知ることができ、とてもいい活動だと思いました。

藤沢市の事例について、この事業は様々な学校の方がメンバーとなっているようですが、この方々全員の交流というのは難しいのでしょうか。

○小沼委員

月1回、メンバー全員による会議を行っています。また年に1回研修会を行っており、施設見学に行ったり講演会を行ったりしています。

○鈴木会長

藤沢市のこのような組織と、専修学校・各種学校も連携できそうな感じがしますが、大田委員いかがでしょうか。

○大田委員

藤沢市の活動はかなり大変そうだという印象をもちました。私たちは私学なので、事業を実施する上での自由度は高いです。社会人講話でも、かなりな立場の方を呼ぶことができます。ですが、もうちょっと低くして、就職して3～4年の方に講話をしてもらおうほうが、小学生、中学生には響くのではないかと思います。それをコーディネートしてくださる先生方がいると、なお理解が進むでしょう。ただ、どうやって動くのかは難しいと思います。私学は自由度が高いので、卒業生同士の輪を活用して講話に来てもらうといったことも可能です。私たちがやっている職業講話では、卒業後3～5年くらいの人たちに来てもらっており、卒業生と生徒のディスカッションに発展するような内容になっています。教育委員会や市で事業を実施するとなると、まず、実施要項などをしっかり作らなくてはならず、大変だろうと思います。もう少し事業実施へのハードルを下げられるとよいと思います。

○鈴木会長

今、職業講話のお話がありました。経営者協会の大橋委員はその人材供給源でもあるわけですが、何か御意見等ありますでしょうか。

○大橋委員

企業の側としては、声をかけていただければ、講師の派遣なども可能なので、積極的に声

をかけていただきたいと思います。食品関係である当社も、小学校に、食育として出張授業に行ったりしています。経営者協会会員企業にはさまざまな職種があるので、声をかけていただければ、協会が窓口になって対応できるのではないかと思います。

○鈴木会長

“声をかけていただければ…”ということでしたが、企業から積極的に動いて、ということもあるといいですね。

○大橋委員

中小企業は、講師派遣などの経験が少なく、企業の側から積極的に働きかけるというのは難しいかもしれませんが、逆に、中小企業のほうが地域に根付いているという意味では、声をかけていただければ、積極的に取り組めるのではないかと思います。

○鈴木会長

小林委員、女性会議の立場から感想などありますか。

○小林委員

かながわ女性会議の事務所は藤沢市朝日町にあります。実際には、県の「かなテラス」をホームグラウンドのようにして活動しています。また、藤沢市の中に入って行って自治会や町内会に呼びかけていくような活動も行っています。

事例発表を伺って、三者連携ふじさわは、かなり歴史のある活動であることを知りました。藤沢市は、公民館やNPOの市民自治活動に、市のほうからアプローチのある自治体だと思っています。ただし、応募の規定が細かくて市民には敷居が高いイメージはあります。公民館は、使い勝手が良いよい立地のところなどもあります。三者連携ふじさわのこれからの取組に期待しています。

○鈴木会長

夏井委員、公民館の話も出てきましたが、何か御意見などございますか。

○夏井委員

学園都市むつあいの事例を聞いて、小学生と高校生との関わりがとてもいいな、と思って聞いていました。身近な方々から話を聞く、自分に近い世代の人の話を聞く機会があるのは、小学生にとってとても参考になると思います。ただ、すでに指摘されているように、公民館がどこにも出てこないのが寂しいと思いました。南足柄市についてもそうですが、公民館には社会教育の様々な活動をしている方がいらっしゃり、社会教育関係団体との関わりもあります。藤沢市は学校がコーディネーターの役割を担っているとの話でしたが、もしコーディネーターが難しい場合は、地域の拠点となる公民館がコーディネーターの役割をすることもできると思います。様々な人材を持っている公民館を、ぜひもっと活用して欲しいです。藤沢市の場合、社会教育を担当する部署が首長部局に移っていますが、県公民館連絡協議会には藤沢市も入っていますので、様々な部分で公民館と連携をとっていただけるといいと思っています。

○小沼委員

公民館との関わりという点で少し補足します。公民館はボランティア名簿を持っていますので、“こういうボランティアさんを探したい”といったときにはその名簿を参考にさせてもらっています。また、コーディネーターの役割を担ってくださる方は、いずれの地域にもいらっしゃると思います。この方は公民館に関連した、地域のことをよくわかっていらっしゃる方です。

○鈴木会長

公民館というのは、かなり使い出があるところです。

○事務局

藤沢市の事例について、以前取材をしたことがありますので、その時に伺った情報により補足します。この事業のスタート時は、教育委員会にある生涯学習課が所管していました。公民館の所管も生涯学習課でしたので、コーディネーターを公民館中心に育成し、今は、ある程度自立した段階にあるのだと思います。数年前、生涯学習所管部署が首長部局に移った際に、学校教育企画課（教育委員会）でこの事業を担当されるようになったと聞いています。すなわち、個別の事業の事務局は公民館（首長部局）、この事業の市行政上の位置づけは教育委員会というねじれの構造になっているとのこと。ですから、連携が進むと言えなくもないが、やりにくくなっているところもある、と伺っています。

○萩原委員

私は、この生涯学習審議会委員3期目で、第11期では、「放課後の子ども達の居場所」の調査研究に関わりました。そこでも、地域資源をどう学校教育に活用できるかという話がありましたが、それよりも、ある小学校の校長先生の指摘がとても印象に残っています。

現在は、地域やNPO等から様々なプログラムが提供されます。また、子ども達の現在の状況を見てみると、習い事をたくさんしていたり、学校にも大人がたくさん入って学習支援が行われるなど、常に、真夏の太陽の日差しのもとで、どこにも隠れる場所がなく大人の視線に晒されています。それが、逆に疲れる状況を生み出してしまっていることが心配だ、という指摘でした。

何のために学社が連携するのか、子ども達にとってどういう環境がよいのか、ということを考えざるを得ない指摘だったと思います。それを思いながら今日の事例を聞いていました。社会教育は、フォーマルではない学びや活動です。フォーマルでないということは、そこには意図や計画がないということ、すなわち、生活のなかで偶発的に人と出会ったり経験したりして、自ら体験し、自ら考えて、自ら学んでいく営みが多く含まれているものだと思います。子ども達にとって楽しく、地域の方にとっても楽しいのは、偶発性にとんだインフォーマルな活動なのではないでしょうか。南足柄市の事例で、地域の方が楽しんで継続して活動しているのは、花壇ボランティアだという報告がありました。それは、花壇の手入れをする活動の中で、地域の方々と子ども達との間で世間話が発生しているためだと思います。そこには、フォーマルな、“教える”というのとは違った関係性があるから楽しいのではないのでしょうか。普段の等身大の子ども達がどんなことを感じているのかを大人が知ること

ができ、子ども達にとっては、親や先生とは違った大人に接することができる、というのが楽しいのではないのでしょうか。そのような、フォーマルな服をまとっていない大人がいることが、子ども達にとって楽しいのだと思います。

シニア世代と子ども世代の関係性には、「冗談関係」が多く含まれています。つまり猥雑なことや子どもの悪さも冗談として受け流してくれる関係、そういう懐の深い関係、遊びのある関係性があつたほうが、子どもにとっても大人にとっても楽しく、関係が長く続くのではないかと思いました。

○鈴木会長

ありがとうございました。今回の議論はこれで終了いたします。今後の審議の運営について事務局から説明をお願いいたします。

○事務局

資料3に基づき、今後の審議会の運営について御説明いたします。この第13期審議会は、「地域と学校の連携・協働の推進」をテーマに平成30年8月の答申提出を目標に議論を進めていただいているところです。この審議会の運営について、第1回審議会では、審議会本会とは別に部会を設置することを想定してスケジュールをお伝えしておりました。その後、会長とも相談の結果、今期のテーマは、幅広い視点からの検討が求められるため、部会ではなく、審議会本体において委員全員による議論を積み重ねることが有効と思われるということで、部会を設置しないでの運営としたいということとなり、今回提案するものです。この場合、答申提出の目標時期は変更ありませんが、審議会の開催が当初予定よりも1回増えて、計7回となる予定です。

○鈴木会長

審議会の回数は増えて7回となりますが、一部の委員のみで組織する部会で、集中的に調査や取材などをするというやり方はやめて、全員で議論を進めるやり方させていただきたいというのが今回の提案です。御意見ございますでしょうか。

(意見なし)

異論がなければこのような形で進めさせていただきます。

今後の流れですが、公募のお二人の委員には各1件ずつ事例の取材と発表をお願いすることとなっています。その後、委員の皆さんにレポートを書いていただき、それらをもとに意見交換してまとめていきたいと思えます。

少し時間がありますが、岸部委員、田中委員、御発言ありますでしょうか。

○岸部委員

南足柄市の事例は、学校単体に対してどう支援していくのかを考えさせられる事例で、地域の力を学校に活かすのに、いろいろな活かし方があるということがわかりました。藤沢市の事例は、地域ごとにゆるやかな組織が作られて、幼小中高、大まで入れた、校種を超えた地域での活動となっているという、勉強になる事例について聞くことができました。一方、南足柄市の事例で、学校では、今そんなに人が欲しいんだということが伝わりました。

○田中委員

私は政治家であり、夢があるのですが、学園都市構想というのはやはり最高の夢だと思っています。私が住む緑園都市（横浜市）では、市内3校目の小中一貫校ができることになりました。緑園都市には、すでにフェリス女学院大学、横浜緑園総合高校がありますので、この小中一貫校ができれば、六会ほどは大きくありませんが、学園都市という形になるのかなと思っています。ただ、町と学校の協力関係はどのようにやっていくのか、と考えているところでしたので、今回の事例は非常に参考になりました。

○鈴木会長

前回は、民間の好奇心のある人たちが中心となって地域の連携を作ろうとした事例と、行政が主導ながら地域の方が関わっている事例。今回は、学校支援地域本部の施策に沿って学校が単独で行っている事例、市全体でのネットワークをつくって活動している事例と、これまで4件報告がされました。次2件については、社会教育の観点で、様々な機関が協力しているものが出てくると面白いと思います。それらの事例を見ながら、議論をしていきたいと思っています。

以上をもって、今日の審議はこれで終了いたします。次回の予定について、事務局からお願いします。

(2) その他

○事務局

先ほど今後の審議会の運営について御了承いただきましたので、資料3にお示したスケジュールを目標に進めさせていただきます。そうしますと、次回は11月上旬の予定となります。また、公募の委員のお二人には、その前に、事例取材をお願いいたします。

○鈴木会長

その他、何かございますでしょうか。なければ進行を事務局に返します。

4 その他

5 閉会